寛政・享和期における桜田臥央の点帖資料について

―江戸後期尾張俳壇の月並句合（二）―

寺島　徹

天明期、化政期の尾張俳人、桜田臥央（一八一〇没）は、暮雨巷一世加藤暁台（一七三二～一七九二）の月並句合を引き継いで[注1]、寛政期、化政期に尾張俳壇の月並発句合を盛んに行ったことで知られている。尾張俳壇における暮雨巷の月並発句合の展開を明確にする作業の一環として、本稿では手元に集まった桜田臥央の点帖資料、ならびに、関連資料である暮雨巷関係の連句評点の点帖資料も紹介していきたい。

一　暮雨巷二世・臥央の月並句合

桜田臥央は、通称、玄丈、別号、暮雨巷。尾張国名古屋桑名町の医師。安永後期から暁台のあとについて、しばしば大津、幻住庵に滞在、暁台とともに、蕪村の夜半亭一派とも交流する。寛政二年の二条家俳諧では執筆をつとめる。暁台没後、暮雨巷を継承、宗匠となり、月並句合を基盤として、尾張周辺の俳人を指導した。編著に『続姑射文庫』（寛政十年）、『幽蘭集』（寛政十一年）、『暁台句集』（文化六年）などがあり、暁台の顕彰活動に励んだ様子がうかがえる[注2]。

臥央の月並句合については、拙稿「尾張俳壇における月並句合について（上）―桜田臥央を中心に―」（蒼穹70号、平成17年3月）、「尾張俳壇における月並句合について（下）―桜田臥央を中心に―」、（蒼穹71号、平成17年5月）において、暮雨巷の月並句合の継承、臥央の月並資料の紹介をもとに素描した。また、近年、加藤定彦氏「『俳諧常磐草』の紹介―暮雨巷月次句合の余波―」（東海近世24号、平成28年7月）によって、寛政初期から文化六年にわたる、暁台、臥央の月次句合の覆刻資料が紹介された。加藤氏稿により、臥央の暮雨巷月次句合の概要が明らかになった。

本稿では、点帖資料に焦点を絞り、あらたな資料を紹介し、臥央の月並句合の特色の一部について論じたい。拙稿「尾張俳壇における月並句合について―桜田臥央を中心に―」（上、下）において、明らかにしたことを簡単にまとめておきたい。

○暁台の月並句合について

暁台の暮雨巷月並句合の特徴には、次の四点があげられる。

（1）季の題は正統的な縦題（和歌題）を比較的多く用いていたこと。

（2）暮雨巷の月並句合は評者暁台が京都に居住しながら尾張門弟を指導していたこと。

（3）津島俳壇の例を見ても明らかなように、名古屋以外の新しい尾張門弟を開拓することを目的の一つとしていたこと。

（4）「点」は秀逸にあたる「鳴鶴」をほとんど出すことがないとい

う厳しいものであり、門弟の鍛錬的性格が強かったこと。

○暮雨巷月並句合の継承をめぐって

暮雨巷月並句合は、暁台没（寛政四年〈一七九二〉一月）後も行われていた。『暮雨庵評ほ句集』（架蔵写本）の寛政四年二月以降の記録が四ヶ月分見られることからも明らかである。その直前の寛政三年九月から寛政四年正月の間に月並句合にブランクが生じているが、これは暁台が咽の病を患ったことと深くかかわっている。

○点印

暁台が没した直後の二月の月並は「採蓮」「桃李」といった漢句を略した入選句の点印から変更され、「音聞」「呼続」「星崎」のように芭蕉ゆかりの名所にちなんだ名称に代えられていた。これは、暁台の初期の連句評点（『百歌仙』）に使われていた点印名称と同一のものである。

○参加者

入集者は暁台の月並句合とあまり変化がない。臥央月次句合の入選者の内訳は、おおよそ名古屋、起、津島、知多、清洲、佐屋等を中心としていた。

○臥央の点取俳諧

真野家文書[注3]に臥央の評が多く見られ、寛政四年以降、大高あたりの俳壇にも臥央が評を与えていた様子が見られる。また、津島の俳人、堀田木吾が記した『俳諧知之随筆』（蓬左文庫蔵）にも臥央の名が散見される。寛政二年（一七九〇）に「臥央寄暮雨巷三題」とあり、臥央が暁台句合の引継役あるいは執筆をつとめていたようである。また、臥央自身、既に寛政二年冬には津島連中を相手に「臥央評五題」の句合を行っていた形跡がうかがえる。寛政五年にも「寛政五癸丑二月三月句合臥央評」を行っている。このような周辺資料より、臥央が正式に暁台の後の暮雨巷月並句合を継いだとみてよい。

○暮雨巷の継承

暁台晩年の特徴は、京都を中心に居を構え、二条家俳諧の創始、月並句合興行を行ったことである。安永末の上方、大津在住から暁台に寄り添った臥央と、尾張の留守居を守った士朗。結果からいえば、暁台の主要な事業は、暮雨巷二世を継ぐ、臥央が引き継いだ。一方、士朗は寛政二年の二条家中興之俳諧に、暮雨巷門の筆頭に着座したものの、その後『二条家御俳諧雑記』（山崎文庫蔵）に「士朗暁台の後を命ぜられども御会不勤」と記され二条家俳諧の宗匠になることを辞退している。二条家宗匠になることと名跡継承には少なからぬ関係があった。二条家俳諧、月並句合を臥央が嗣ぎ、尾張俳壇の地盤を士朗が嗣いだとみてよいだろう。

二　臥央の月並点帖資料

以上が、旧稿までに明らかにした概略である。ただ、これまで臥央の点帖（清書巻）に関する資料の調査・分析が手薄だった。その面について資料を補強し、分析してみたい。まず、現在手にとることのできた臥央の点帖について書誌を示してみたい。

〔点帖１〕臥央評「二題句合」（仮題）

書誌

装幀　中本一冊。
表紙　共表紙。
寸法　縦二一・五×横一五・六糎。
題簽　なし。「二題句合」（中央、打付け書き）
丁数　墨付き十一丁。
行数　半丁につき五句。

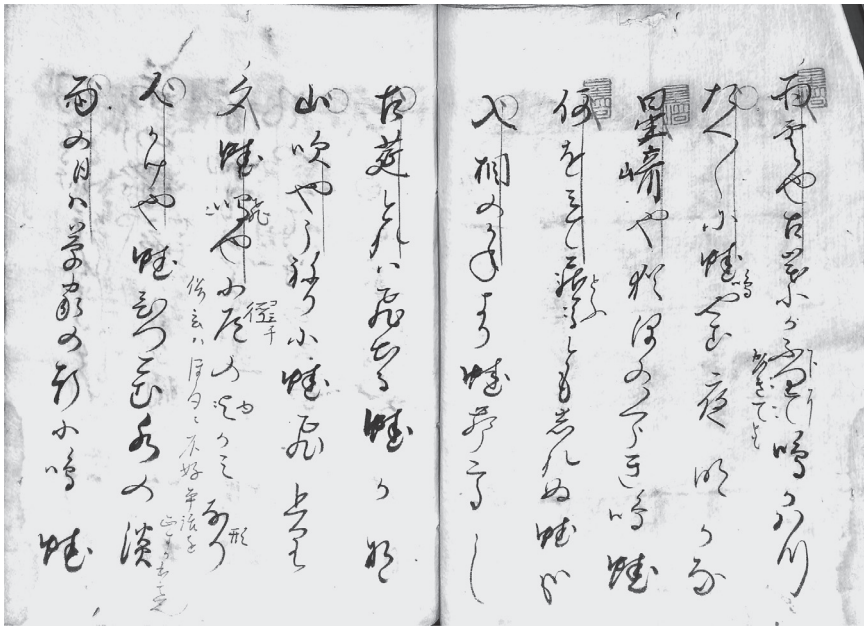

図１　臥央評「二題句合」（架蔵）

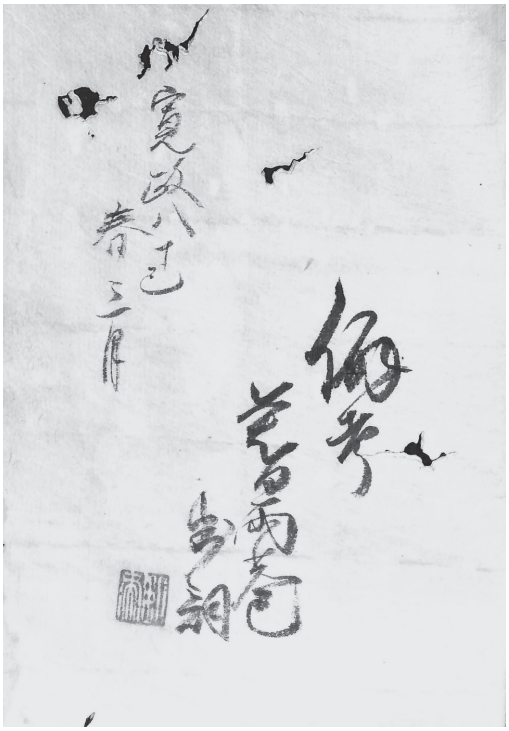

図２　臥央評「二題句合」落款

題　「桃」「蛙」（見返し墨書）
寄句数　五十句。
奥　僻考暮雨巷判詞　「臥央」（白文方印）
　寛政八丁巳春三月
書写者　句―執筆　判詞・添削臥央筆。
点印　「星崎」○（朱）
年代　寛政八年か
所蔵　架蔵

〔点帖２〕臥央評「寛政九・十年点帖」（仮題）

書誌

装幀　半紙本写二冊。袋綴。
表紙　砥の粉色、布目紋。

寸法　（一）縦二四・二×横一七・五糎。（二）縦二四・五×横一七・二糎。
題簽　なし
丁数　（一）墨付二十八丁（二）墨付五十七丁。

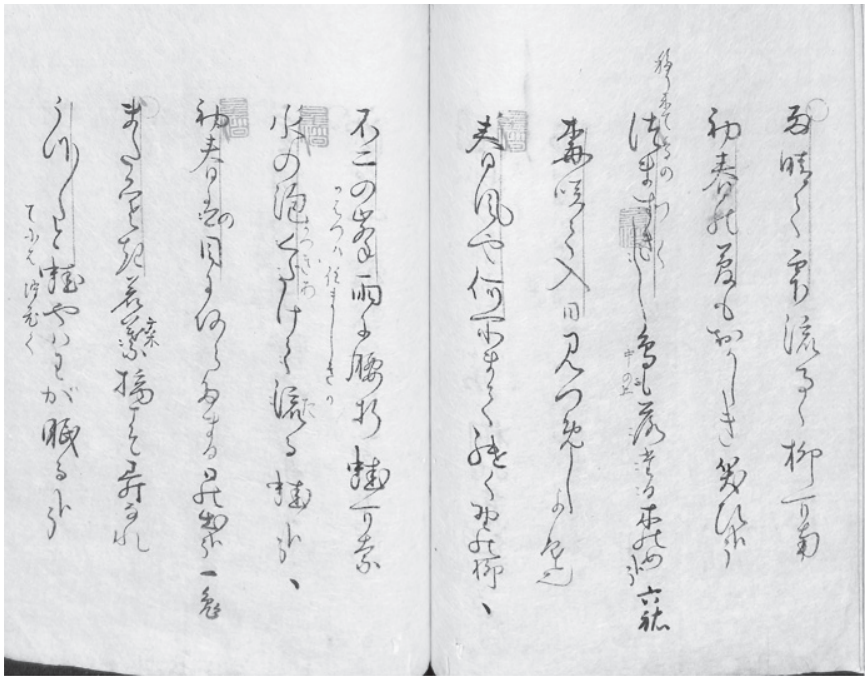

図３　臥央評『にほひ深き部』（架蔵）

行数　半丁につき五句。
題　（一）「冬至」「冬籠」「帰り花」「霜夜」「大根引」「炭」
（二）「若草」「雉」「柳」「春の風」「春の水」
投句人数　（一）三十人（推定）（二）五十五人（推定）。

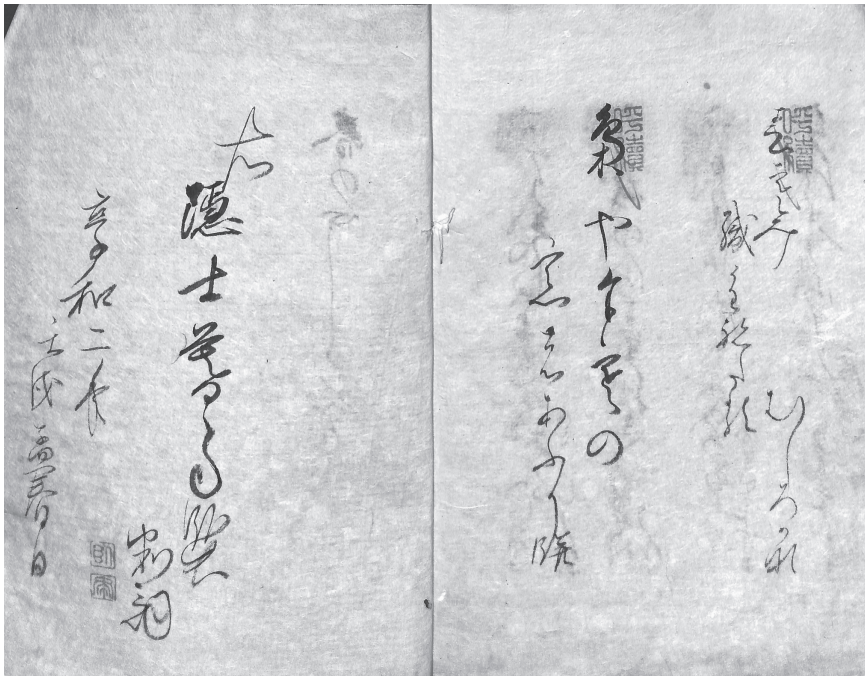

図４　臥央評『にほひ深き部』落款

寄句数　（一）二百三十六句（二）五百一句。
奥　（一）時寛政九年丁巳晩冬日／於暮雨巷　蓬涯判。（白文方印）
（二）狂墨　暮雨巷臥央判「暮」「雨」（朱文方印）
干時寛政十年戊午　仲春日
書写者　句―執筆　判詞・添削・入選句の転記―臥央筆
点印　「星崎」「呼続」「音聞」　○（朱印）
年代　（一）寛政九年十二月（二）寛政十年二月
所蔵　一宮市尾西歴史民俗資料館
請求番号　C俳諧11「暮雨庵門句集（桜田臥央）」
備考　丁刷に載せるための高点句（音聞、呼続、星崎）を抜き出し、後にまとめて「たまのこゑ」（九年）、「出乎群」（十年）として、俳人名に所付も付けて記す。この部分は、臥央筆。（一）には朱の訂正も所々見られる。

〔点帖3〕臥央評『にほひ深き部』

書誌

装幀　半紙本写一冊。袋綴。
表紙　浅葱色、布目紋。
寸法　縦二三・五×横一六・五糎。
題簽　「にほひ深き部　全」（中央）
丁数　墨付き三十七・五丁。
行数　半丁につき五句。
題　「余寒」「木の芽」「初春」「蛙」「柳」
投句人数　四十人（推定）。
寄句数　三百二十九句。
奥　右隠士暮雨臥央判詞　「臥」「央」（朱文方印）
享和二年壬戌孟春日
書写者　句―執筆　判詞・添削・入選句の転記（にほひ深き部）―臥央筆
点印　「星崎」「呼続」○（朱印）
年代　享和二年四月
所蔵　架蔵
備考　丁刷に載せるための高点句（呼続、星崎）を抜き出し、後にまとめて「にほひ深き部」として、俳人名に所付もつけて記す。この部分は、臥央筆。

以上の三点である。寛政八年から享和二年までのおよそ六年間のものであり、壮年期の臥央の俳壇経営、評点の傾向について知ることができる。(注4)

「二題句合」は、懐紙のとじ合わせであり、高点「星崎」を得ても、参加者の名前が明記されていない。継続的な暮雨巷五題月次句合とは別立ての発句合だったのであろう。一方、『寛政九・十年点帖』、『にほひ深き部』では、「星崎」以上の点を得れば、作者名が明記される。そこからわかる参加者を確認してみよう。

『寛政九・十年点帖』は、起の邦左（九年）磊石（十年）が巻軸の高点をとっており、清書巻を彼らが褒美として貰ったものであろう。磊石は国学者加藤磯足のことで邦左はその甥である。暁台と天明期を通じて深い交流があり、臥央がそれを引き継いだ。(注5)『寛政十年点帖』を中心に参加者をみてみると、その起の磊石、魯石、如水、菊洲、兀士、碩外、鴉兮、邦左、寸龍らが目立つ。最大勢力は、知多の季白、里卜、可逸、瓶城、芦扇、勿視、大芝、八甫、松木、市丸、芳洲、如暁、其猿、隠市、烏千、有之と起を上回る勢力であることも見逃せな

い。卜二、貞之、吐虹、里桂、不若、庭川ら清洲連中、甫水、一水、黄戎ら津島の連中がつづく。なお、単独では、魯角（大クテ）、孔玉（三河）の参加がみられる。

これらの点帖は、拙稿「尾張俳壇における月並句合について―桜田臥央を中心に―」（上、下）で引用した「暮雨巷臥央撰丙辰丁巳五題句集」の最終部とそれにつづく、翌年二月にあたるものである。そのため、その参加者の傾向は、この丁刷と重なるものといってよい。第一節で述べたように、拙稿の発表のあと、近年、加藤氏「『俳諧常磐草』の紹介―暮雨巷月次句合の余波―」が紹介され、寛政四年頃から文化六年にかけて臥央の月次句合の概要を把握することが可能となった。『俳諧常磐草』によって、臥央の尾張俳壇の経営をより体系的に把握することが可能となったのである。これらの点帖を『俳諧常磐草』に照らすと、『寛政十年点帖』は、年次が不明であった「第一冊廿九、三十丁」[注6]にみえる二月題句合と一致することがわかる。

つぎに、点帖『にほひふかき部』をみてみよう。『にほひふかき部』は、『寛政九・十年点帖』から三、四年後の点帖となる。同じく、起、知多、清洲のメンバーが中心で、当然ながら、『寛政十年点帖』と重なる俳人も多い。重なるメンバーをあげると卜二（清洲）、可逸（知多）、兀士（起）、蛙山、里卜（知多）、如水（起）、蘆川（清洲）、孔玉（三河）、貞之（清洲）、大芝（知多）となる。臥央をとりまく、二代暮雨巷の中心的なメンバーと言えるだろう。『俳諧常磐草』に照らすと、「第一冊四十四丁目」に合致する。臥央は、このような名古屋外延部の尾張俳人を月並句合のシステムを用いて傘下においていたものと思われる。『俳諧常磐草』から概括的に俯瞰できることではあるが、一部丁刷に漏れている俳人もおり、今回紹介した点帖により、寛政を経て、享和期になっても、その傾向に大きな変化がなかったことが裏づけられよう。『寛政十年点帖』と『にほひふかき部』を比較すると、規模が半分近くに減少しているが、寛政期をピークとして徐々に後退していったのではなく、月によりかなりばらつきがあったのだろう。今後の資料の出現が望まれる。

三　臥央評の傾向

つぎに、三種の発句合の点帖をみながら、「仮名遣い」「切字」「本意本情」「俗語」などに関する評の傾向についてみていこう。（点印は、（　）に入れ略称で示した。句の清濁は原典のまま、判詞は（　）に入れ、清濁を適宜付した。ミセケチは――で示した。）

（星）鶯のこ〻定まりて桃の花　（二題句合）
○　何やらをミかくよふなり鳴蛙　（二題句合）
（星）雉子の声焼野、烟遥かなり　卜二　（寛政十年点帖）
（野、と書ハ故人ま、誤れり。わけての、字ニ可書事也）
（星）若草や人のとふらぬ道もなし　黄戎　（寛政十年点帖）
（かよはぬ）
降そふな雲のミにして餘寒哉　（にほひ深き部）
手枕や夢をとろかすはつ蛙　（にほひ深き部）
（星）をきかねてをきてもねたき余寒・哉　雪阜　（にほひ深き部）
衣ほすはつ木のも〻る芽出シ哉　（にほひ深き部）
（星）江戸見〻て伝馬〻下る餘寒哉　三及　（にほひ深き部）

仮名遣いについては、いわゆる契沖仮名遣い（歴史的仮名遣い）でない場合、それを正確にただそうという姿勢がみられる。暁台の点帖にもそのような傾向がみられるが、臥央の場合も顕著である。臥央は、

寛政元年に、士朗らと本居宣長の鈴屋門に入門しており、国学への意識もあり、仮名遣いへの拘りも強かったものと考えられる。また、ト二の踊り字のような批正も複数みえ、そのような文字遣いにも拘りがあることがわかる。ただ、添削を施し、高点を与えたケースも多く、このような形式的な面より句の内面のできばえを重視していた様子がうかがえる。

（星）一年に桜おひこすも丶の花　（二題句合）
（切字なし）
○　つたひ聞春やむかしの桃の花　（二題句合）
（切字なし）
○　ひなの臭又美しき桃の花　（二題句合）
（切字なし）
○　若草に駒はかりとらぬ歩ミ哉　季白　（寛政十年点帖）
（星）春の風・夕となりてしつかなり　吐虹　（寛政十年点帖）
（星）篝火に魚の近よる春のみつ　（寛政十年点帖）
（切字難し）
（星）奈良坂小寺〳〵古し春の草　磊石　（寛政十年点帖）
春風にきのふもけふも雉子の声　（寛政十年点帖）
（切字無覚束）
春雨の中より雉子の啼出し　（寛政十年点帖）
（切字無覚束）
（星）暮かゝる日や静まりて雉子の声　里宝　（寛政十年点帖）
（星）晴を啼雉子に又ふるさゝの雨・　（寛政十年点帖）
（切字なし）
（星）初春の風街道の吉野口　雪水　（にほひふかき部）

このように、切字に関する言及・添削も多くみられる。切字の用い方に関する具体的な言及も多くみられ、批正の上、高点を得ているものも少なくない。この傾向は仮名遣いのときと同様である。ただし、句の構造上「切れ」が認められないときは、内容にも深く関わることであり、高点を与えていない場合も目立つ。

風つれてのひるやう也柳哉　（寛政十年点帖）
（也のかなとまり侍らず）
若草やこほれ出たる袂哉　（寛政十年点帖）
（やかなとハ申しがたし）

とくに、いわゆる「や・かな」の規則に反した例などの批正もみられ、このような拙く、重い誤りには高点を与えていない。

日の陰のやとふ柳の雫哉　卜一　（にほひ深き部）
（一三あやなす座　二）

このように語順を大幅に入れ替える例がみられる。添削では普通に行われることではあるが、臥央の場合はとくに頻繁にみられる。

二ツ三ツつほミもたの・し桃の花　（二題句合）
（梅ならんか）
飛前をねしむひて見る蛙哉　（二題句合）
（鳥ニても）
人の果は只春水のなかれ哉　（寛政十年点帖）
（春の字のはたらきなし）
・水降の月をうこかす柳哉　（にほひ深き部）
（上五聞えかね候）

不二の峯雨に腰折蛙かな　（にほひ深き部）
（かはつハ住まじきか）

詠み込む語の本意本情を上手く読み取れていないもの、あるいは、他に振る（振り替えられる）ものについては、当然評価は低く、具体的に指摘もされる。「不二の」句のように、対象の取合せが似つかわしくない点への指摘もみえる。

（星）吉野山春たつ風そ初桜（雲のうごきかな）　雪水　（にほひ深き部）
（ちとむつかし）
冬暮て春をらく花に初桜　（にほひ深き部）
（ちとむつかし）
初春や心ハ木の芽とふハ松　（にほひ深き部）
（ちとむつかし）
加茂やしろ鶯の筆柳也　（にほひ深き部）
（ちと聞えかね候か）

「むつかし」と評したものも少なくない。多くは、本意本情が上手くとらえられていないものであり、「聞こえない」（一句として意味がとおらない）との指摘も見える。

のほくつて右につらうつ蛙哉　（二題句合）
（冠五あまりの俗云ニ過て）
夕蛙鳴（飛）や小道（経）のよかミ（ゆ）なり（形）　（二題句合）
（俗言ハほ句ニ不好平話を正すが本意也）
一ツ鳴ケハそれからそれへ鳴蛙　（二題句合）
（めづらしからずかし）

俗な語の利用に批判的な言葉が目立つ。「のぼくる」という尾張の方言を批判し、「俗言ハほ句ニ不好平話を正すが本意也」に、発句の格への意識と卑俗的な俗談平和をただすべきとの姿勢がよみとれる。「一ツ鳴ケハ」句のただごと的な発想へも厳しい批判がみえる。

鷺をりて鳴やむ小田の蛙かな　（二題句合）
（ちと古めかし）
よく聞ハ蛙かきくけこと鳴ぬ　（二題句合）
（古調にて当流に好ミ侍らず）

一方で、古調への批判にも注意したい。前代の風体への批判である。とくに、「よく聞けバ」のようにまるで雑俳でみられるような手法や、美濃派のただ事的表現には厳しい。この傾向は、とくに『二題句合』に偏っており、この句合が通常の暮雨巷月次句合のメンバーとは異なる初心者向けのものであった可能性を示唆している。

このほかで、気になった点についてとり上げたい。

若草やけしき調ふ明の雨　（寛政十年点帖）
（七文字恐れがましき）
○　夜嵐やくたけて渡る春の風　（寛政十年点帖）
（春の風夜ハあらしに乱れけり　先師）

「若草や」句は、芭蕉の「春もやゝけしきとゝのふ月と梅」（『薦獅子集』など）の措辞を意識した句である。その措辞を使うのは、恐れおおいというのであろう。暁台にも、芭蕉を意識した「月による気色ともなくもゝの花」（『暁台句集』『暮雨巷句巣』等）がある。暁台の

ものは、芭蕉句を踏みながらも、換骨奪胎したものだが、これと異なる「若草や」句の安易な着想を批判的にとらえたものであろう。「夜嵐や」も、暁台句「はる風の夜はあらしにみだれけり」（『暁台句集』ほか）と発想が近いと指摘している。このあたりは、等類や同巣という問題と関わっており、この時点で暁台の発句集が公刊されていなかったことを思えば、臥央の指摘の意味するところも思慮されよう。

「趣」に関する批判もみえる。

糸柳結ひ揚たり舟のうへ　（寛政十年点帖）
（趣めづらしからぬニ候）
○　春雨のはてハ地を摺柳哉　（にほひ深き部）
（其趣不珍重）

とくに、「春雨の」句は、理屈くさいのを否定しているのであろう。『去来抄』（先師評）に、「凩の地にもおとさぬしぐれ哉」という去来の句が、最初「凩の地まで」となっていたのを、芭蕉が「いやし」として、直したことが記されている。理屈っぽく説明的になる句を批正したものであるが、臥央の指摘も、春雨のせいで柳が地面につくという説明的な趣を否定したものであろう。

（星）雉子の声宇治の川きり晴にけり（たえ〳〵に）　如水　（寛政十年点帖）

これは、定頼の「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらわれわたる瀬々の網代木」（『千載集』『百人一首』）を本歌としている。宇治川の霧が晴れたら、網代木ではなく、雉子の声が聞こえてきたとするところが俳諧であろうが、臥央は、より本歌に寄り添う形で添削していることが特徴であろう。

以上、臥央の批評、添削の傾向について簡単にみてきたが、切字、仮名遣いなど作法的なことは師である暁台を、ある程度忠実に受け継いでいるように考えられる。また、古風やただ事、理屈への批判もみえた。これらも、暁台の志向と通ずるものであるが、当代全般の蕉門の傾向とも通底するため、臥央の独自性なのか、時代の影響なのか、今後より精査していく必要があると考えられる。ともあれ、射倖性は低く、鍛錬的な発句合であったことはうかがえよう。

こころみに、『寛政十年点帖』の最高点「音聞」を得た巻軸句を示しておこう。

（音）雉子の声宇治の川霧たえ〳〵に　如水（チタ）　（寛政十年点帖）
（音）奈良坂や寺は朽ても春の草　磊石（オコシ）　（寛政十年点帖）

平明かつ本意本情にのっとった比較的格調の高い句を好んでいるといえようか。それは、臥央の代表句、

秋の夜のあることしらば窓の月　（わらづと）

等にもいえることで、理屈、趣向を好まず、平明な句を好む臥央の一面が点帖の評からもみてとれよう。

四　帯梅の連句評点

臥央の三つの月並句合の点帖を紹介した。点帖の調査の過程において、右にみた発句合の点帖に関連するものとして名古屋市博物館に「暮雨巷判」とする連句評点の点帖も残存することを見出し得た。評の傾向をみるため、紹介してみよう。まず、書誌を示そう。

書誌

装幀　半紙本一冊。
表紙　紺色、菊紋散らし（後装）。
寸法　縦二四・五×横一七・二糎。
題簽　左肩・無記。
丁数　墨付き四丁。遊び紙三丁。
行数　半丁につき五句。
句数　歌仙一巻
奥　右暮雨巷判
書写者　句―執筆　判詞・添削帯梅筆。
点印　「高砂」・桜紋など
所蔵　名古屋市博物館蔵
請求番号　和は－69（『俳諧歌仙「蚊遣り火を…」』）

奥には暮雨巷の落款があるが、落款印も不鮮明で、一見して宗匠の特定がしづらい。ただ、暮雨巷一世暁台、二世臥央の筆蹟とは異なる。結論からいえば暮雨巷三世村瀬帯梅の評点資料と考えられる。点印が、暁台、それを受け継いだ臥央のものと異なること、また、巻軸・点位のメンバー、民情、梅裏が尾張横須賀の帯梅と関わりの深い俳人であることもそれを裏づけよう。短冊などに見られる帯梅の筆蹟ともとくに矛盾しない。

帯梅は、村瀬氏。宝暦八年（一七五八）生。文政九年（一八三六）没。名は、祥副、狐塚古観と号した。尾張横須賀の両口屋如東の息で、暁台に師事して明和八年（一七七一）の『東君』に少年帯梅として初参加。暁台没後は臥央についた。『龍の登』（文政元年〈一八一八〉）を編み、この頃暮雨巷三世を継いでいる。その俳歴については、前掲の服部徳次郎氏『暮雨巷暁台の門人』等に詳しい。

評の内容であるが、付け筋、三句わたりに加え、句数・去り嫌いなど、作法の面での指摘が多い。当時の『俳諧独稽古』（楼川編、文政十一年跋）などの作法書には、少々の指合は見逃せと書いたものも少なくないが、帯梅は、かなり厳しく知多の門弟を批正をしている様子がうかがえる。師であった暁台は式目、作法に殊の外厳しいという通説があったが、帯梅もこれに習ったものであろうか。年代は帯梅の暮雨巷継承を考慮すれば、文政期のものと考えられる。

今後の分析に資する資料であるため、全文を翻刻しておきたい。点印は、（　）に入れて示した。原則新字体を用いる。句の清濁・仮名遣いは原典のまま、判詞は（　）に入れ、清濁を適宜付した。

翻刻

（高）蚊遣火を人の来て焚庵哉　梅裏
又も小窓を探る涼風
（探るのこと葉穏ならず）
はら〳〵と雨もつ雲の飛行て
（初五冠リかね候）
（高）ちから一はいさし入る舟　民情
月闇く覚束なくも国の山
（雲の打こしに月くらくと云テハ
ゆかしがたし）」
（桜）灯細き鹿小家の軒　裏
駕籠の垂下ケても風の空寒く
（風躰二句去れバよく候へど風と云ずに
依りたし。見渡しよろしからず。）

（高）尋ね〳〵て医者の門口　巴橋
（高）孤子の眉目（ミメ）よく生立愛盛り　楚嵐
まつしき中に重き忠孝
（下七文字かたくて時ニおくれ候）　」
（桜）おり〳〵に夜深き空の神詣　情
（高）わすれかねつる文のやくそく　仝
侭ならぬ身そ恨ミ鳧掛り人
（けるこそ等の手尓葉御吟味句作可被成候）
手なれぬ業を習ふ此秋
（ふのぬさし合候）
稲刈のとや〳〵帰る霄の月
足洗ふにはよい落し水
（稲かりニ落し水かゝり過候）
（桜）潔（イサギ）よくいなゝく花の二才駒　嵐
霞のはれて矢つほ違はす
春ふかく吾妻生立と仰かれし
（生立と云ことハ前に出たり。耳立候）
（絵）謡おしへて世を暮（渡る）すらむ　情　」
（絵）押懸て酒宴催す八ツ下り　裏
（高）また生壁にいとふ（のにほ）小座敷　仝
婚礼のはやまる針に雇れて
（云たらず）
（桜）眠りもせぬに明る短夜　橋
次の間は首途をいそく木賃宿
（居所三句去べし）　」
（桜）谷闇きこゆる安部川の水　嵐
（木魂か）

心ざす敵のそなへは落延て
（一句きこへかね候）
（桜）影かすかなる東雲の月　情
露分て市へ切出す真桑瓜
（是は夏ノ句也。秋にはあらず。西瓜と
すれば秋也）　」
秋さひしらぬ賤かあはら家
子供よりおとなのきほに辻踊
（七文字解しかね候）
（桜）公領はたもと入こみの村　嵐
（高）名目をつけて刀を指たかり　情
（絵）伊勢参宮に人気さはだつ　仝
気も合ふて前髪同士の花見つれ
（人気に気も合ふてとはいかゞ）　」
たら〳〵辷る若艸のうへ

右暮雨巷判（朱印）

三十五点　民情
二十点　梅裏
十四点　楚嵐
八点　巴橋
〆七十七点

注

1尾張の加藤暁台の事例を拙稿「暁台の晩年と月並句合」（連歌俳諧研究94）「（翻刻）中興期俳諧月並句合資料―加藤暁台の点取帖・摺物・投句控」（国

文学研究資料館文献資料部調査研究報告19号）において取り上げた。

2臥央の事蹟については、服部徳次郎氏『暮雨巷暁台の門人』（愛知学院大学、昭和47年）が詳しい。

3服部徳次郎氏『真野家文書』（豊明市編纂室、平成７年３月）参照。

4『寛政九年点帖』の奥に「蓬涯判」とあることについては、後考を待ちたい。

5磊石は起の本陣、加藤磯足のこと。国学者であり、宣長門人として知られる。『美濃路起宿　本陣・問屋加藤家　問屋永田家　文書目録』（尾西市歴史民俗資料館、昭和61年３月）参照。

6加藤定彦氏「『俳諧常磐草』の紹介―暮雨巷月次句合の余波―」の六十八頁から七十一頁の一覧表による。

［付記］入校後の調査で、東海市横須賀町の旧家に、暮雨巷三世、村瀬帯梅の発句合の点帖二点が所蔵されることが判明した。本来、本稿の暮雨巷二世臥央に続く点帖資料として紹介すべきものであるが、別稿に譲りたい。本稿は科学研究費の研究助成（基盤研究（C）課題番号 17K02471）による成果の一部である。貴重な資料の翻刻をご許可いただいた名古屋市博物館に感謝申し上げたい。